

「神興東歴史の旅」第6弾

ふるさとの祭り〜八並不動様

八並 占部 善鹿

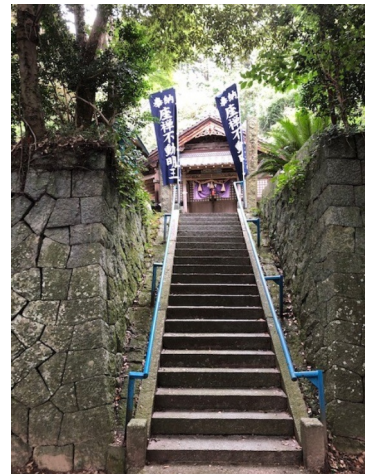
八並公民館横の脇道より、東方の山門に向かって緩やかな坂道が延びている。山門を潜ると一転、急勾配の参道に入り、その突きあたりから石段60段を登ると小高い丘の上の境内に至る。正面に通夜堂、その裏に本堂があり、その右手に小さな諸堂が建立されている。

境内の周囲に鬱蒼と茂る樹林の中には樹齢百年を超える椎木が点在している。その中でも、手水舎の横手の崖のご神木とよばれているものは、幹の周りが約5メートルもある。

本堂には本尊である不動明王の座像(木造、座高45cm)が安置されており「八並不動様」という呼び名で親しまれている。五色で塗られた本尊は不動明王独特の非常に厳しい、恐ろしい姿をしており、憤怒相(ふんぬそう)と呼ば



《八並不動尊》



《通夜堂前60段の石段》

れる陰
しい顔
つきで、
紅蓮の
炎を背
負い、
右手に
は剣を
左手に

は絹索(けんじやく)を携えている(現在本尊の塗色は褪せて剥げ落ちた部分が多く、左右の剣、絹索は虫食いによって僅かに跡形を残すのみ)。不動様の創建時期は不明であり、山号、院号、寺号も無く、詳しい資料も無いが「筑前国統風土記拾遺」には以下の記述がある。

「不動堂古田にあり、木佛なり。昔此処の畑の岸より、穿出せり。昔其の上にキセン庵とて寺あり、此像は其の寺の本尊なるべしといふ。庵の跡には古墓今も残りてあり」と。また境内には奉納寄進年が正確に読み取れる。最も古い石造りの常夜灯があり、「文化九 壬申年(西暦一八一二年)」という文字列を読み取ることが出来る。これらの資料に基づいて考察すると、八並不動様の創建時期は江戸時代後期かと推測される。

2月28日大祭日御座

八並不動様の縁日は毎月28日、そのうち2月28日が「大祭日」であり、今日に至るまで大祭日には御座と呼ばれる祭事が連綿と執り行われて来た。その歴史は100年以上に遡ることができる。日頃は閑散とした境内も、この伝統祭

事の当日は、家内繁盛、災厄除けを願う信者たちが地元からも遠方からも押し寄せて大勢で賑わう。通夜堂では、地元住民信者でつくる保存会の人々がぜんざいを振る舞い、参拝者たちをもてなす。

百度参り

現在では絶えているが、戦前には百度参りが盛んに行われていた。百度参りは願いを叶えてもらおうと、神仏に百回お参りして祈願すること。八並不動様で行われていた百度参りは、本堂から百度石を回り、本堂まで戻ることを百回繰り返す。その際はははだして回数間違えない方法として、前述の神木(椎木)の葉っぱを百枚用意しておき、礼拝の度に一枚を本堂に供えて行き、百枚目供えたところで願解きが終わるといふものがあった。家族が長患いをする病気の平癒を願って願掛けの礼拝をして病気が治ったら願解きの礼拝するのが常であった。

また、一人で百枚の葉っぱを持ち運ぶことがなかなか大変なこともあり、家族を伴って百度参りをする人もあった。願解きが終われば、不動様に祈願の成就を報告し感謝の気持ち伝え、通夜堂で家族等と共に弁当を頂く仕来りがあった。

おわりに

八並不動様は、許斐山西麓の高台にあります。森に包まれた境内は静かです。街の喧騒から離れて、この清らかな空気の中を歩いていると、心身を洗われるような気持ちになります。是非一度参拝に足を運んでください。